

NEWS FILE

家庭の経済格差と
子どもの認知・非認知能力格差の関係分析

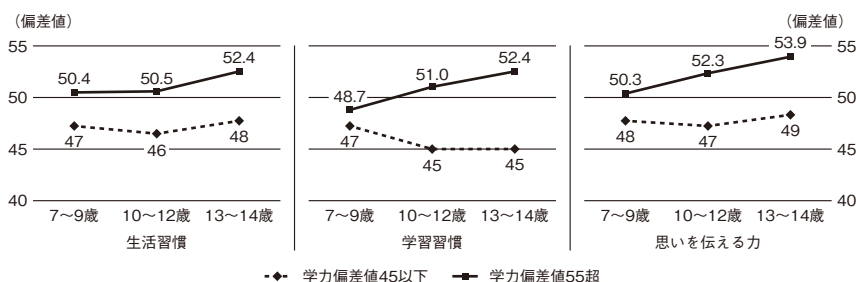
日本財団が就学期の子ども約2万5千人のデータを活用し、認知能力（学力）および非認知能力（自己肯定感、生活習慣、コミュニケーション力など）と、家庭の経済状況との関係を分析した。

その結果、貧困状態にあると、学力は低くなる傾向があり、特に小学校4年生（10歳）を境に貧富による学力差が拡大することが分かった。小学校高学年から中学校と学年・校種が上がるにつれて、貧困世帯は低学力へ、そうでない世帯は高学力へと集中していくことも明らかとなった。

一方、「朝ご飯を毎日食べる」「スポーツや習い事

など頑張っていることの有無」などの非認知能力は、低学年時点から貧困世帯とそうでない世帯で差が大きかった。しかし、たとえ貧困下であっても学力の高い子どもは、生活習慣や「思いを伝える力」などが高かった。そのため、学習の土台となる生活習慣などの非認知能力の育成の重要性が示された。

分析結果のレポートは、日本財団のウェブサイトからダウンロードすることができる（https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/ending_child_poverty/）。



貧困世帯における学力の高い子どもと低い子どもの非認知能力（日本財団，2017）

CONTENTS

- 新学習指導要領が求めるこれからの体づくり運動とは 佐々木浩（国士舘大学） 2
- こうすればできる！体育理論のアクティブ・ラーニング 木原慎介（東京国際大学） 5
- 平成30年度用副読本（ルール）の主な変更点 8

新学習指導要領が求める これからの体づくり運動とは

佐々木浩
(国士舘大学)

1 体づくり運動の変更点

表1に、新旧学習指導要領の体づくり運動の「運動の内容」を示しました。この表でまず目につくのが名称の変更でしょう。現行の体づくり運動は「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成されていましたが、新学習指導要領では「体ほぐしの運動」の名称は変わりませんが、「体力を高める運動」が1・2年で「体の動きを高める運動」に、3年では「実生活に生かす運動の計画」に変更されました。

次に、その具体的内容を見ていきます。

1) 体ほぐしの運動について

平成10年に体ほぐしの運動が登場してから、現行の学習指導要領までそのねらいは「気付き」「調整」「交流」の3つでした。それが今回の改訂で「調整」という文言が消えました。これは、「調整」というねらいが体ほぐしの運動では今一つ達成が難しかった現状をくみ取ったものと考えられます。しかし、「調整」すること自体を止めたのではなく、それは新たに示された「心身の状態に気付く」に含めて考えることができます。また、新学習指導要領解説で示されましたが、体の動きを高める運動の中（力を調整して動くこと）にもそのねらいを読み取

ることができます。さらに、「交流」は「関わり合うこと」に表現が変わり、文末に位置づくことによりねらいを明確にしたことが分かります。そして、その関わり合い方も「積極的」（1・2年）から「自主的」（3年）にと系統性も示されました。

2) 体の動きを高める運動について

「体力」から「体の動き」へと名称の変更がありました。これは、体づくり運動の改訂で一番の目玉かもしれません。しかし、「体の動き」とは、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力の総称であり、従来とそのねらいは変わりません。実はこの名称変更は、小学校高学年でも同様に行われました。さらに、中学校1・2年の「運動の計画に取り組む」が削除されたことにより、小学校中学年まで学習してきた「多様な動きをつくる運動（遊び）」を、「体の動き」として小学校高学年と中学校1・2年でさらに高めていくという方針が明確になったことが分かります。これからは、体力要素の向上に特化した安易な反復トレーニングの実践ではなく、小中と系統性のある調和のとれた「体の動き」を高める実践が望まれます。

3) 実生活に生かす運動の計画について

体力を高める運動からの名称変更になります。し

表1 中学校体づくり運動の「運動の内容」における新旧学習指導要領の比較

	現行学習指導要領（平成20年公示）	新学習指導要領（平成29年公示）
1・2年	ア 体ほぐしの運動では、心と体の関係に気付き、 <u>体の調子を整え、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。</u> イ <u>体力</u> を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせて <u>運動の計画に取り組むこと。</u>	ア 体ほぐしの運動では、 <u>手軽な運動を行い、心と体との関係や心身の状態に気付き、仲間と積極的に関わり合うこと。</u> イ <u>体の動き</u> を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせること。
3年	ア 体ほぐしの運動では、心と体は互いに影響し変化することに気付き、 <u>体の状態に応じて体の調子を整え、仲間と積極的に交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。</u> イ <u>体力</u> を高める運動では、ねらいに応じて、健康の保持増進や調和の取れた体力の向上を図るための運動の計画を立て取り組むこと。	ア 体ほぐしの運動では、 <u>手軽な運動を行い、心と体は互いに影響し変化することや心身の状態に気付き、仲間と自主的に関わり合うこと。</u> イ <u>実生活に生かす運動の計画</u> では、ねらいに応じて、健康の保持増進や調和の取れた体力の向上を図るための運動の計画を立て取り組むこと。

かし、運動の内容は変わりません。

4) 内容の取扱いについて

「内容の取扱い」に関して大きな変更はありませんが、1・2年生の「体の動きを高める運動」について「音楽に合わせて運動するなどの工夫を図ること」と示されました。音楽を効果的に用いて楽しくリズムカルに行う指導の工夫が求められます。

2 新学習指導要領に準拠した授業実践例

1) 単元名 リズム体操&パーソナルエクササイズ
(体の動きを高める運動)：第2学年

2) 授業づくりのポイント

【リズム体操】

テンポのよい音楽に合わせて複数の運動を組み合

わせて行うことにより、調和の取れた体力を高めることをねらいます。一連の動きは、有酸素運動をベースに動的ストレッチや巧みな動き、そして力強い動きと4つの体の動きをバランスよく組み合わせ、よりよく動ける身体をつくります。

オリエンテーションでは、基本的な動きで構成された「はじめのやさしい動き」をひとまとまりの体操として学習します。単元前半では、各種の高めたい動きをグループ内で工夫し合わせます。単元後半では、グループでつくった動きをバランスよく高め、総合的に体の動きを高めていきます。

【パーソナルエクササイズ】

「体の柔らかさを高めるための運動」「巧みな動きを高めるための運動」「力強い動きを高めるための

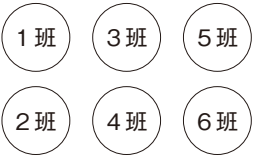
表2 評価規準

知識及び運動	① 体づくり運動の意義について、理解したことを言ったり、書き出したりしている。 ② 安全で合理的な体の動きの高め方について行ったり、書き出したりしている。 ③ 運動の効率の良い組み合わせとバランスの良い組み合わせ方について、学習した具体例を挙げている。
思考力、判断力、表現力等	① 体の動きを高めるために、自己の課題に応じた運動を選んでいる。 ② 仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方や、仲間との関わり方を見付けている。 ③ 体力の程度や性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための運動を見付け、仲間に伝えている。
学びに向かう力、人間性等	① 仲間の補助をしたり助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 ② 一人一人の違いに応じた動きなどを認めようとしている。 ③ ねらいに応じた行い方などについての話合いに参加しようとしている。 ④ 健康・安全に留意しようとしている。

表3 指導と評価の計画

	1		2・3		4・5・6			7
10 20 30 40 50	○オリエンテーション		リズム体操					○まとめ ・グループ毎に成果を確かめる。 ・リズム体操の発表をする。 ・動きの伸びを評価し、単元のまとめをする。 ・今後の生活に生かすようにする。
	・学習のねらいと進め方を知り、単元の見通しを持つ。 ・グループ単位で「はじめのやさしい動き」と方法を知る(リズム体操)。 ・自己の体力を分析し学習コースを選択する(パーソナルエクササイズ)。 ・学習カードの使い方を知る。		◆1人1つの動きをつくり、グループ全員で合わせる。 ・音楽や基本の動きを手がかりに1人1つの動きを考える。 ・4つの高めたい体の動きをバランスよく組み合わせる。 ・グループで合わせる。 ・ペア・グループで見合う。		◆グループ毎に一連の体操を工夫し、よりよい動きに高める。 ・動きや隊形等を工夫し動きを高める。 ・一連の体操を音楽に合わせて滑らかにできるようにし、総合的に動きを高める。 ・ペア・グループで見合い高め合う。			
			パーソナルエクササイズ					
			◆基本的な動きに挑戦し、ねらいとしている動きを高める。 ・柔らかさアップコース ・巧みさアップコース ・力強さアップコース ・スタミナアップコース		◆工夫した動きに挑戦し、さらに動きを高める。 ・柔らかさアップコース ・巧みさアップコース ・力強さアップコース ・スタミナアップコース			
評価	知運	①			②		③	①
	思判表		①	②		③		②
	学び	④	①		②	③		②

表4 本時の展開（「リズム体操」3時間目）

	学習内容・活動	指導上の留意点・評価
10	○集合・整列・あいさつ ○準備運動と本時のねらい「1人1つの動きをつくり、グループ全員で合わせよう」の確認 ○グループ毎に1人1つの動きを練習する。 【動きの例】 ・グーパー跳び（はずむ） ・ヒザ立ちブリッジ（伸ばす・曲げる） ・8の字回し（振る、回す） ・後ろひねり（ひねる） ・腕立て足屈伸（支える） ・肩入れ（二人組） ○グループ全員で動いてみて修正する。 ・一連の動きがなめらかに調子よく組み合わせられるよう練習する。 	○グループの仲間ができそうなものを考えるよう助言する。 ○一つ一つの動きをリズムカルに、大きく全身を使ってできるよう助言する。 ○グループで円形になり、音楽に合わせてつなげていくよう助言する。 ○励まし、声を掛け合っている児童やグループを賞賛する。 ○音楽に合わせて順番に動きをつないでいくよう助言する。 ○動きの高まりが見られない児童には、正対して具体的なアドバイスを与え、上達のポイントをつかませる。 「そう、膝を曲げて。いいね。」 「力強いよ。いいね。指先まで。」 「1・2・3・4。リズムに合わせて。」 仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方や、仲間との関わり方を見付けている。 [思判表②]
25	○ペアグループの体操を見合い、高め合う。 ・ペアグループ内の個人ペアの動きも見合う。 <動きを高める条件> ・空間的運動条件（方向・大きさ等） ・時間的運動条件（速さ・リズム等） ・力動的運動条件（強弱等）	○リズムカルに大きく行っている児童やグループを賞賛する ○自分のペアとなる仲間についてもみ合うよう助言する。 「もうこれ以上伸ばせないかな？」 「もうこれ以上弾めないかな？」 「リズムに合っているかな？」 「友達の動きと合っているかな？」 「一つ一つ正確かな？」 ○互いの良いところを見つけるよう助言する。 ○動きが高まった児童やグループを賞賛し、次時につなげる。
30		

* 「パーソナルエクササイズ」は紙面の都合により省略

運動」「動きを持続する能力を高めるための運動」の4つの動きの中から自分に合った動きを選択し高めることをねらいます。各エクササイズコースでは、個人のねらいや体力に応じて負荷を決め、適切な強度、姿勢、回数などを考慮した運動を効率よく組み合わせます。

オリエンテーションでは、自分の体力を知り各種の動きを安全で合理的に高める行い方を理解します。単元前半では、自分に合ったエクササイズコースで基本的な動きに挑戦し動きを高めます。単元後半では、動きを工夫したり、より難しい動きに挑戦したりして体力を効率よく高めていきます。

なお、本単元で作り上げた「リズム体操」や「パーソナルエクササイズ」は、その後の準備運動や補強運動等教育活動全体や実生活で生かすようにします。

3) 単元の目標

○体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体づくり運動の意義と行い方、体の動きを高める方法など

理解し、目的に適した運動を身に付け、組み合わせることができるようにする。

○自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

○体づくり運動を積極的に取り組むとともに、仲間の学習を援助しようとする事、一人一人の違いに応じた動きなどを認めようとする事、話合いに参加しようとする事などや、健康・安全に気を配ることができるようにする。

4) 評価規準（表2）

5) 指導と評価の計画及び本時の展開（表3、4）

引用・参考文献

○佐々木浩（2009）「表現」と「記録の達成」を取り入れた体づくり運動の授業，体育科教育別冊新しい体づくり運動の授業づくり，高橋健夫編，大修館書店。

○文部科学省（2008）中学校学習指導要領，平成20年3月告示。

○文部科学省（2017）中学校学習指導要領，平成29年3月告示。

こうすればできる！ 体育理論のアクティブ・ラーニング

木原慎介
(東京国際大学)

昨年3月に小・中学校学習指導要領が改訂され、いよいよ今年4月から移行期間に入る。そこで、本稿では「明日の授業からすぐに活用できる、アクティブ・ラーニングを実現するためのヒント」について考えてみたい。事例として、体育理論「(2) 運動やスポーツの意義や効果と学び方と安全な行い方(ウ) 安全な運動やスポーツの行い方」を取り上げる。なお、授業づくりの骨子となる考え方は他の単元や領域さらには保健学習においても同様であると考えている。

＊

まず、はじめに確認しておくこととして、学習指導要領の本体部分および解説部分から、本単元において理解させる内容と触れる内容を箇条書きにするなどして指導内容を整理・明確化しておく必要がある(表1、2)。

次に、上記の指導内容を身に付けさせるべく、50分の授業を大きく3パート(導入、展開、まとめ)で構成し、各パートにおいて「ねらいたい生徒の反応」とそれを引き出すための具体的な「ポイントと流し方」および留意事項(※)をいくつか挙げた。指導観や生徒の実態等に応じて選択または参考にされたい。

1 導入(つかみ)

1) 気持ちを引きつける

ねらいたい生徒の反応 「ん?」「何だ何だ?」「何これ?」

ポイントと流し方 想像力が膨らみそうな話題や資料を提示するが、目に見える情報はなるべく少なくする。

発問1 「昨日のTV(ニュース、新聞など)でこんなシーンがありました(こんな写真が載っていました)。どうしたのだろう。なぜこうなったと思う?」



↓

活動1 全体でフリートークを行う。

※スポーツでケガをしたであろう写真などで興味関心を抱かせる。

2) 学習課題をもたせる。

ねらいたい生徒の反応 「今日の授業はちょっと面白そうかも!」「どんなことをやるのかな?」

ポイントと流し方 身近な話題・経験から、生徒が選択し、全員で共有する(→やらされ感をできるだけ軽減)。

発問2 「今までやってきた体育の授業でもこのよ

表1 本体部分(192頁)

運動やスポーツを行う際は、その特性や目的、発達の段階や体調などを踏まえて運動を選ぶなど、健康安全に留意する必要があること。

知識として確実に身に付けさせる内容。学習評価の対象となる。

知識として身に付けさせる必要はないが、授業の中で触れておく内容。学習評価の対象外。

表2 解説部分(194頁)より木原作成

<理解させる内容>

安全に運動やスポーツを行うために重要なこととして

- ・特性や目的に適した運動やスポーツを選択し、発達の段階に応じた強度、時間、頻度に配慮した計画を立案すること
- ・体調、施設や用具の安全を事前に確認すること
- ・準備運動や整理運動を適切に実施すること
- ・運動やスポーツの実施中や実施後には、適切な休憩や水分補給を行うこと
- ・共に活動する仲間の安全にも配慮すること

<触れる内容>

- ・野外での活動では自然や気象などに関する知識をもつことが必要であること

うにケガしたり、体調を崩したりしたことはあるかな?」「例えば、陸上、器械運動、水泳、球技、武道、ダンスの中でどのようなケガがあった?」【A】



活動2 2～3人組で意見を出し合い学習カードに記入する。その後、全体で共有する（発表させて板書に残しておく）。



説明1 「今日は“運動やスポーツの安全な行い方”について学習していくよ」

※分かりやすく答えやすい発問をする。

※体育授業の各運動領域で実際にあった体験談を生徒から引き出す。

※または、以下のような展開もあり得る。

発問2' 「このような安全面とか健康面については、今までの体育授業でもいろいろと学習してきましたよね」「例えばどんなことがあったかな。長距離走、跳び箱運動、水泳、バスケットボール、柔道から選んで思い出してみよう!」



活動2に進む。

※運動特性や運動施設・用具という点でケガや体調不良の起きやすい種目に例え、健康安全に関する学習内容を生徒から引き出す。

2 展開（メイン、本ネタ）

1) 情報を収集（調べ）させる

ねらいたい生徒の反応 「へー!」「こんなにあるんだ!」「こんなこともあるんだ!」

ポイントと流し方 WEBサイトを提示し、検索ワードを焦点化することで、新たな気づきを促す。

発問3 「実は日本スポーツ振興センターというところが、毎年学校でどのような事故が起きているかを調査し、その結果をインターネットで公開しています。今から、そのWEBサイト「学校事故事例検索データベース」(図)を使って、スポーツの種類(陸上、器械運動、水泳、球技、武道、ダンス)ごとにどんな事故事例があるかを調べてみよう!」【B】



活動3 パソコン室にてペアにつき1台の割合で、自らキーワードを入れて検索をかけ調べる。調べた結果は学習カードに記入後、全体で共有する（発表させて板書に残しておく）。

※ICTを活用して自ら課題意識をもって情報を獲得していく場面



図 学校事故事例検索データベース

https://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/anzen_school/tabid/822/Default.aspx

になる。

※ペアで1台を使用させることにより、関わり合う場面をつくる。

※教室でタブレットPCを用いて行ってもよい。台数が不足している場合は、教室で教師用PCをスクリーンや電子黒板等に映して行う（例えば何人かの生徒に代表で検索させる）。

※検索するキーワードには、体育分野の運動領域で取り上げるスポーツの種類（各種の陸上競技、器械運動、水泳、球技、武道、ダンスなど）を入力させる。

2) 収集した情報を分類させる

ねらいたい生徒の反応 「これとこれの共通点はこうなるのかな。〇〇さんはどう思う?」「そうだね。こういうのもどうかな?」

ポイントと流し方 思考・判断する材料を提示し、思考・判断する作業スペースを提供し、話し合いのルールを設定する。

発問4 「【A】と【B】を含めて、たくさんの事故事例が挙がったね。細かく見るとスポーツ種目によって違いがあることが分かるね。では、大きく見てみるとどうかな。種目の違いに関わらず何か共通するような点がない?」「事故事例の共通点を見つけて分類しよう!話し合う時に否定はNG。仲間の意見を認めつつ自分の考えを伝えるようにすると考えが深まるよ」



活動4 2～3人組で話し合いながら学習カード上で分類する。その後、全体で共有する（発表させて板書に残しておく）。

※協働作業を通した対話場面である。

※共通点を見つけるのが難しい場合は、分類するカテゴリーを示してもよい（例えば、「運動施設・用具に関する事故」「体調不良に関する事故」「仲間との関わりによる事故」など）。

※以下のような展開によって、保健分野の学習内容（2年次）との関連を図ることもあり得る。

発問4 「【A】と【B】を含めて、たくさんの事故事例が挙がったね。いろいろな楽しさとか必要性などをもつ運動やスポーツをしていく中で、このようなケガや体調を崩してしまうことは仕方ないことなのか、それとも何か防ぐ方法があるのか、どちらだと思う?」「実はケガの原因と防止に関しては保健でも学習しているんだけど……。挙がった事故事例を“人的要因”と“環境要因”とに分類してみよう!話し合う時に否定はNG。仲間の意見を認めつつ自分の考えを伝えるようにすると考えが深まるよ」

↓
活動4に進む。

3 | まとめ(オチ)

1) メイン(本ネタ)を整理・統合し、解説する

ねらいたい生徒の反応 「へ〜!」「なるほど!」「そういうことか!」

ポイントと流し方 これまで展開してきた活動と本時の学習内容とをつなぎ、重要箇所を強調する。

説明2 「今までいろいろな作業をしてきたね。ここで今日の授業で最も大切なことを言います。それは、“運動やスポーツには種目等に関わらず共通して安全な行い方がある”ということです」

《板書例》

安全に運動やスポーツを行うために、

- ・特性や目的に合ったものを選ぶ。
- ・自分に合った運動強度、時間、頻度を考えて運動計画を立てる。
- ・自分の体調、運動施設・用具の安全を事前に確かめておく。
- ・適切に準備運動・整理運動を行う。
- ・休憩や水分補給をしながら行う。
- ・仲間の安全にも気を配る。

↓
まとめ1 学習カードに記入し、教科書で該当箇所を確認する。

※教師から生徒へ知識を確実に教える場面。

※最重要の内容なので板書し、学習カードに記入させる。記入は穴埋め式でもよいが、記号ではなく文字で書かせる方が望ましい。また、本時の学習活動と関連させながら丁寧に解説を加える。その際、体づくり運動をはじめ今までに行ってきた体育学

習の具体的内容を例に挙げるとよい。

※特に、体づくり運動における自己の体力やねらいに応じた運動計画や、仲間への安全配慮は一人一人の違いを認めることともつながること、公正・責任・協力といった態度に関することなどについては生徒自身では浮かびにくいと思われるので、教師が導くようにする。

※他にも、休憩や水分補給と熱中症(保健分野)、万が一ケガをした場合の応急手当(保健分野)、野外活動では自然や気象などに関する知識をもつことが必要であること(本時の触れる内容)と自然体験学習などの行事(特別活動)などとの関連性を持たせながら展開することも考えられる。

※一方で、例えに挙げる具体的内容や関連を持たせる内容については、それ自体は各分野各領域における指導内容なので、ここでは深入りしないように留意する。

2) 学んだ知識を活用して、自分自身の課題とその解決方法を見付ける

ねらいたい生徒の反応 「ここに当てはまりそうだな!」「こうするといいだろうな!」「〇〇君はどう?」

ポイントと流し方 知識を活用し、場面を当てはめ、伝え合う。

説明3 「今日学習したことは運動やスポーツに共通した安全な行い方だね。板書した内容については、体育の各運動を通して今までも学習してきましたし、これからも学習していきます。今日の内容と結び付けると理解が深まって課題の発見や解決のヒントにもなるよ!」「最後に、今日の学習内容を使って、これまでに自分が行ってきた運動・スポーツ経験の中で起きたケガの原因とその再発防止策について考えよう。ケガの経験がない人は、今後も安全に行うために、特に何を大切にスポーツを行っていけばよいか、その理由も含めて考えよう!」

↓
まとめ2 学習カードに記入し、2〜3人組で共有する。

※習得した知識を活用する活動をつくる。

※体育の授業でも、部活動でも、体育的行事でも、地域のスポーツクラブでもどの場面に当てはめてもよい。

※知識の理解度を確認するペーパーテストを行ってもよい。

注) 今回の改訂の基本方針では、育成すべき子供たちの姿を見据えた時に「主体的・対話的で深い学び」が実現できるような授業改善の視点(アクティブラーニング)が必要であるとしている。アクティブラーニングは特定の型や方式化された授業の方法や技術のことではないとされ、具体的な学習プロセスは限りなく存在し得るものであるとされている。

平成30年度用副読本(ルール)の主な変更点

すでにご承知の先生方も多いことと存じますが、ルールの変更に伴い2018年度版の教材を以下のように修正致しました(『ステップアップ中学体育2018』に掲載できた範囲に限ります)。

バスケットボール

■おもなパーソナルファウル (p130)

アンスポーツマンライクファウルが適応される場合を以下のとおり詳しく記載しました。

- ⑧ボールに対するプレイではなく、かつ、正当なバスケットボールのプレイとは認められないプレイ。過度な接触(ハード・ファウル)。速攻を止めることや、攻撃側プレイヤーの進行を妨害することを目的とした必要のないファウル。速攻のとき、攻撃側プレイヤーとゴールの間に誰もいない状況で、攻撃側プレイヤーの後ろからもしくは横からファウルしたとき。第4ピリオドもしくは延長残り2分の状況で、スロー・インのボールが攻撃側プレイヤーの手から離れる前に防御側プレイヤーがファウルしたとき。(アンスポーツマンライクファウル) → ㉒

※プレイヤーは、アンスポーツマンライクファウル1つ、テクニカルファウル1つで失格・退場になる。アンスポーツマンライクファウル、テクニカルファウルそれぞれ2つでも同様。

ハンドボール

■試合の進め方 (p147)

「チームの構成」を「1チームは出場プレイヤー7人(チーム内で指名されたゴールキーパー1人が出場できる)」、…。」から「1チームは出場プレイヤー7人(自チームのゴールキーパーがいない状況でも、最大で同時に7人のコートプレイヤーがプレイできる)」、…。」に修正しました。

■反則があった場合 (p148)

「パッシブプレイ」に次の一文を追加しました。

「※パッシブプレイの予告合図が示されたあと、攻撃

側は最大6回までパスやシュートの機会が与えられる。」

サッカー

■警告、退場 (p168)

「警告、退場」に次の一文を追加しました。

「※一時退場(シンビン): 警告となる反則をしたときに試合への参加を一時的に認めないことにより罰するもの。競技会規定で認めることができる。」

柔道

■柔道のおもなルール (p259)

「試合時間と勝負の判定」「技の判定基準」などを以下のとおり修正しました。

○試合時間

「20歳以下は4分、…」から「男女とも4分、…」に修正。

○優勢勝ち

「a『技あり』をとっているとき B『有効』をとっているとき c 反則の数に差があったとき d a, b, cともに同じ場合、延長戦をおこなう。」から「『技あり』をとっているとき、『技あり』の数と同じ場合、延長戦をおこなう。」に修正。

○反則勝ち

「相手が…、4回目の指導を受けたとき。」から「相手が…、3回目の指導を受けたとき。」に修正。

○技の判定基準

「有効」を削除、「技あり」の判定基準を投げ技では「相手をコントロールして投げて体の上部側面が着地したとき。」に、固め技では「『おさえ込み』の宣告から10秒以上20秒未満経過したとき。」に修正。

○審判のしかた

「主審の合図」の「有効」を削除。

中学保健体育科ニュース 2018年 No.1 (通算27号)

2018年3月15日発行

●編集 大修館書店編集部

●発行所 株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

TEL 03-3868-2298 (編集部) / FAX 03-3868-2645

[出版情報] <http://www.taishukan.co.jp>

●印刷・製本 広研印刷株式会社